平成31年1月1日発行　毎月1回1日発行　通巻612号　ISSN　1347-7862

Fole

1
January 2019
No.196

第1特集

「現金の呪い」と「キャッシュレス時代」

第2特集

ご利益別「あなたの願いをかなえる」神社・寺院15選

上田紀行の Vol.01

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

生きる喜び、働く喜びを取り戻す現代版「コムニタス」のススメ

昭和という時代には、皆で豊かになるという希望がありました。電車に乗り込み、集団の一員になりさえすれば、終点には豊かな世界が待っていると確信できました。「自分は何のために生きているのか」を考える必要がなかった時代だといえるでしょう。

ところが現代は、電車に乗り込めたとしても決して安心はできません。車掌から突然「君、業績が上がっていないから、この駅で降りてくれ」と言われかねない。つまり今は、個として生きる意味を見付けないとならない時代になったのです。徹底的にいいものを作ろうという姿勢も過去のものになり、「働く意味」も見いだしにくくなりました。

私が専門とする文化人類学の観点からは、私たちに生きる喜び・働く喜びを取り戻すということを考えた場合、狩猟採集社会から農耕社会へ移行した歴史が参考になると考えられます。

狩猟採集社会では、獲物を平等に分配することが前提です。それが農耕社会に移行したことで、穀物の貯蔵・保存が可能になり、人々の間に「階層」が生まれました。

農耕社会では、収穫期になってようやく「日々の労働が実った」ことを実感し、生きていることの意味を感じることができます。つまり収穫は毎日のことではないので、「今を生きる喜び」は感じにくい。農耕社会は、生きる喜びを先送りせざるを得ない社会だともいえるわけです。

このように農耕社会においては、「その日の喜びを先延ばしする」ことが日常化しており、これを専門的には「目的への疎外」と呼んでいます。これが延々と続くと、生きる喜びは感じられなくなってしまいますね。

ではどうするか。農耕社会では、収穫後に盛大なお祭りを開きます。これは神様に感謝するという目的の他、実は「目的への疎外」から解放される、という意味があるのです。お祭りの間は、無礼講が許されます。「働くのは大変だったけれど、収穫できてよかった。生きていて楽しい。幸せだ」と解放感を味わうことで、生きる喜びや働く意味を感じるというわけです。こうしたお祭りの時間は「コムニタス」と呼ばれます。「われわれは生きているんだ。みんな仲間なんだ」という意識に満たされる瞬間のことです。

コムニタスの一例として、ガーナに住むアシャンティ人の「アポ」と呼ばれる儀礼を紹介しましょう。

おもしろいことに、アポの期間中は無礼講に加え、好き放題他人の悪口を言うことが許されます。アシャンティ人は、王や首長に対してさえも悪口を許すことで、「魂が鎮められる」と考えるのです。

日々の生活を一度振り返ってみてください。皆さんは解放感を味わい、生きる喜びや働く意味を感じることができますか。社長であれば、社員にそう思わせることができていますか。ひょっとすると、「現代版のコムニタス」が必要かもしれませんよ。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔払い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

平成31年2月1日発行　毎月1回1日発行　通巻613号　ISSN　1347-7862

Fole

2
February 2019
No.197

第1特集　人生100年時代の前向きシフト

定年、必要ですか?

第2特集　ついしたくなる、つい使いたくなる

人を動かす「仕掛け」の作り方

上田紀行の Vol.02

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

孤独に病む現代の日本人を癒やす「悪魔」祓いの儀式

何かがついている――。海外から久しぶりに帰国し、友人たちに会ったとき、生気のなさに、そう感じたことがあります。自分の健康を、家族を、時間を、いや人生の全てを犠牲にして働き続けている。そこから何を得られるのか、不思議に思うほどです。通勤風景を見ても、一定の間隔で到着する電車に次々とのみ込まれていく人々の生気のなさ。東京には目に見えない巨大な社会システムはある、だけど人はいない。そう感じさせられました。

それでいて会社からは、みんなで一丸となって頑張ろう、という空気が失われています。成果主義が広まり、誰もが自分のミスを隠すようになる一方で、評価に結び付きそうなことだけは明るく話すようになっています。そのしらじらしさに耐えられなくなったから、と会社を辞めて起業した教え子さえいます。一見、明るそうな職場ですが、この教え子にとっては、みんなとつながりたい、という思いの満たされない孤独な環境だったのです。

スリランカの村では、こうした孤独な人に「悪魔」がつくといわれています。孤独なときは、周囲の目が冷たい、誰も助けてくれない、……と世界が自分に対して「NO」を突き付けているように感じます。すると人は心を閉ざし、世界に対して自分からも「NO」を投げ付け、孤独の極限に至ってしまう。世界中が敵になって生命力が失われてしまったとき、「悪魔」に取りつかれ、心身を病んでしまうわけです。

心身を病んでしまった人に対してスリランカの呪術師がいまでも行うのが、「悪魔」祓いの儀式です。文化人類学ではそのような呪術的な儀式を後進的なまじないと見下していた時代もありました。しかしいまでは、異なる文化を理解し、その社会構造や風俗習慣などの意味を絵解きしようとする立場に立っています。

私が調査した村では、「悪魔」祓いを受けた患者24人のうち４分の３は心身の不調が治り、問題は解決したと答えました。効果がなかった患者が残る４分の１はいるにしても、大多数の患者が癒やされ、生き生きとした暮らしを取り戻したのは紛れもない事実です。病院では治らなかった心身の不調が「悪魔」祓いによって癒やされたのです。

なぜ、これだけの患者を癒やすことができるのでしょうか。それは、「悪魔」祓いが患者の生命力を活性化させるからです。共同体とのつながりを回復させるとともに、「悪魔」が自分の体から去っていくというイメージを体に染み込ませることで、孤独によるストレスで低下してしまった免疫力を高める儀式なのです。

現代の日本人は全てを犠牲にして働く中で、孤独の極限に至り、生命力が失われつつあります。「悪魔」に取りつかれてしまっている人は決して少なくないはずです。現代の日本人には、この「悪魔」祓いこそが求められているのではないでしょうか。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔払い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

平成31年3月1日発行　毎月1回1日発行　通巻614号　ISSN　1347-7862

Fole

3
March 2019
No.198

第1特集　「変えない」から愛される

「ご当地飲料」ロングセラーの秘密

第2特集　〈金融〉だけじゃない

「ブロックチェーン」最新活用事例集

上田紀行の　Vol.03

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

「悪魔」祓いのメカニズムにみる癒やしの正体

スリランカの「悪魔」祓(はら)いは、古くから伝わる癒やしの術です。

心身の不調を訴え、病院を受診するものの、いっこうに良くならない。現代医学でいえば心身症や神経症の症状に苦しむ患者が、呪術師を訪ね、不調は「悪魔」のせいという説明に納得すると、その容体に応じた規模の「悪魔」祓いが行われます。

非科学的な迷信で現代人には関係ないと思われがちですが、人を癒やし生命力を活性化させる儀礼と捉えれば、そんなことはありません。満たされない心と体を抱える現代人にこそ求められているとさえいえます。

大規模な儀礼になると、村人も多く詰め掛ける一大パフォーマンスです。夕方から翌朝まで徹夜で行われます。

まず患者と「悪魔」への供え物を前に呪術師が歌い踊りながら、ブッダの力で「悪魔」は出ていく、と繰り返します。患者の中で「悪魔」のイメージが高まり、一体化すると、お祓いを始めます。呪術師は「悪魔」を自身に移し替え、走り去ります。「悪魔」が去って参加者がほっとしたところでお笑い演芸会に移ります。患者から抜け出た「悪魔」が仮面をかぶって次々に登場し、駄じゃれや替え歌などで会場内に笑いを起こします。「悪魔」が抜け出た患者は、村人らと笑い合って朝を迎えます。

最後、患者と仮面をかぶった「悪魔」との間で、こんなやりとりが交わされます。「お前は病気をもっているか。せっかくだから、とっとけよ」「いいえ、もう病気ではありません」。患者自ら、「悪魔」なしで生きていきます、と言い切ります。

重要なのは、「悪魔」と一体化し、それが抜け出る、という点です。患者は儀礼を通して、「悪魔」がブッダの力で体外に排出されることをイメージします。イメージによって免疫力は上がりもするし下がりもします。「悪魔」祓いはイメージ療法ともいえます。

もう一つ、お笑い演芸会の存在も重要です。患者はそこで、体外に排出された「悪魔」を客観的に見ます。しかも、多くの村人と笑い合いながら見ることで、孤独感からの回復も感じ取れます。笑いには、人をつなげる効果があります。同時に息を吸い、同時に息を吐く。それが、身体的なつながりを感じさせます。

この「悪魔」祓いでもたらされる癒やしは、「悪魔」の抹殺によるものではありません。「悪魔」との和解によるものです。

「悪魔」がつくのは孤独な人といわれます。孤独の中で自ら世界に対して「NO」を投げつけ、世界中を敵に回し、生命力が枯渇してしまう。そんなときに「悪魔」がやって来ます。世界を敵に回してしまった責任は、患者側にもあるのです。自ら世界に「YES」を言っていかなければ、根本的な状況は変わりません。

敵として見えていた「悪魔」は実は友だちで、それを敵としていたのは自分なのである。「悪魔」祓いの癒やしは、そこに気付くことでもたらされるのものなのです。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔払い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年4月1日発行　毎月1回1日発行　通巻615号　ISSN　1347-7862

Fole

4
April 2019
No.199

第1特集　「叱る」より「導き」「学べ」

「今どき社員」を動かす極意

第2特集　家事のマッチングをする時代に

働く人を支える「人の手サービス」

上田紀行の

Vol.04

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

会社だけに頼らない「複線的」人生を目指そう

悩み多き現代の日本人を癒やすには、どうすればいいのでしょうか。スリランカの村に連れて行き、前回ご紹介したような「悪魔」祓(ばら)いの儀式を行えば癒やされるかというと、そうでもないように思います。

「悪魔」祓いの儀式は共同体を挙げて行います。その村の住人は子ども時代から、誰かが孤独を感じて心身を病んでしまったらみんなが集まって「悪魔」祓いを行い、最後には病んでしまった人も元気になる、という光景を何度も目の当たりにしています。その経験は論理を超えて体の中に染み込んでいきます。

つまり幼少時から、誰かが「ヤバく」なったら、共同体のみんながその人を助けてくれる、癒やしてくれる、という経験をたくさん積んでいるのです。この教育的効果は非常に大きい。共同体への信頼が培われるからです。

日本人は残念ながら、そうした経験を積んでいません。日本で「ヤバく」なった人がどうなるかを思うと、むしろ暗たんたる気持ちにさせられます。

テレビでは年に何回か、「誰でもいいから殺したかった」と、街中で刃物を振り回す人の事件を報じています。それだけでなく、リストカットもあります。そうした社会で育てば、自分も「ヤバく」なったら同様のことをするようになる、と無意識のうちに刷り込まれてしまいかねません。

レジリエンスという言葉があります。回復する力、立ち直る力です。人は病んだり挫折したりするけれど、回復したり立ち直ったりする力を持ち合わせています。ところが、いまの学生と接していると、このレジリエンスが乏しい。1回でも失敗したくない、1回でも失敗したらもうおしまい、という学生が多くみられます。

「悪魔」祓いの癒やしをもつ社会は、人は「悪魔」つきになるときが人生で何回かあるという前提に立ち、レジリエンスに富んでいます。しかも、刃物を振り回したりリストカットしたりする状況よりよほどエレガントです。「悪魔」につかれた人が救われるのを目の当たりにして、自分がもし「悪魔」につかれても、共同体のみんなが助けてくれる、社会は自分に「YES」を言ってくれる、という信頼が根付いています。

問題は、人生が単線的で自分の属する共同体が会社くらいしかないという点です。だから、リストラで会社からいったん「NO」を突き付けられてしまうと、居場所を失い、孤独に陥り、「悪魔」に取りつかれてしまうのです。

他国では、共同体は会社に限りません。宗教や人種のつながりなど、いくつかの共同体に属しています。だから、たとえ会社を解雇されたとしても、それらの共同体に複層的に支えられることが可能です。

現代人にはいま、会社だけに頼らない複線的な人生が求められます。これまで唯一の共同体だった会社が「悪魔」祓いを行えないのであれば、複線的な人生を送る中でそれを行えるような共同体を自ら構築していくことが欠かせません。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔払い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年5月1日発行　毎月1回1日発行　通巻616号　ISSN　1347-7862

Fole

5
May 2019
No.200

第1特集

「スマートスタジアム」がスポーツビジネスを変える

第2特集　ニッポンの国民病

「孤独」に陥らない4つの処方箋

上田紀行の

Vol.05

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

「できる人」から「魅力的な人」へ

人生の中では挫折を味わうことがあります。浮き沈みのある人生を生き抜くには、自らの生き方を立て直す力が不可欠です。

私たちは明治以降、良い大学に入り、良い企業に勤める、という会社単線的なサクセスストーリーの実現を目標に掲げてきました。しかしいまは、それよりも、自らの生き方を立て直すレジリエンスの向上を目指すべきです。

それは、人間としての引き出しの多さとも重なります。引き出しが多ければ、仮に職を失うことになっても、退職金を元手に次に何をやろうか、とその後の生き方に別の楽しみを見いだすことができます。ところが引き出しの限られた、会社単線的な生き方を歩んできた人はそうはいきません。職を失うことになった途端に、人生をはかなんでしまいます。

引き出しの豊かな複線的な生き方は、人口減少の時代に経済成長をどう果たしていくかという観点からも重要です。

実は、江戸時代の日本人は必ずしも勤勉ではありませんでした。いうなれば、明治以降の教育のたまものとして日本人は勤勉さを身に付け、経済成長を果たしてきたのです。ところが人口減少時代を迎え、勤勉さを武器に同じ成果を上げようとするなら、一人一人がこれまでの何倍も働かざるを得ません。人間を優秀なロボットとして捉え、ひたすら労働時間を長くし、ノルマのプレッシャーをかけ続けていくしかないのです。しかしいまの時代、さすがにそれは現実的ではありません。

そこで、一人一人が生み出す価値を高める、労働の質的な変化が不可欠です。その一つがクリエーティビティーの発揮でしょう。そうした変化をもたらすには、一人一人が自らの人生をもっと楽しもうとする姿勢が欠かせません。勤勉なロボットのようにではなく、人間らしく生きていこうとする意識が重要になります。

会社単線的な生き方を脱し、人生を複線化していこうとするときには、「できる人」から「魅力的な人」への転換を目指したいものです。

「できる人」は、決まった枠組みの中で最適なパフォーマンスを発揮できる人を指します。これに対して「魅力的な人」は、自らも輝きながら周囲の人の潜在性を引き出し、その人がその場にいる必要性を教えてくれるような人です。

決して「できる人」になることを否定しているわけではありません。若いときには自立することがいちばんです。自分のことさえおぼつかない人間が、他人のことを支えられるわけがありません。

けれども40歳くらいになって周りから「できる人」と評価されるようになったら、自分の生き方を見直し「魅力的な人」を目指すべき時期です。

人間的な魅力への評価は石垣の土台のようにそう簡単に揺らぐことはありません。他者からの評価をいちいち気に掛けずに済みます。「魅力的な人」として他人を支えていくことは、結果的に自分を支えることにもつながっていくのです。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年6月1日発行　毎月1回1日発行　通巻617号　ISSN　1347-7862

Fole

6
June 2019
No.201

第1特集　40億個の荷物に挑む

「物流ベンチャー」の革命

第2特集　脱・視覚依存のすすめ

「目の見えない人」の世界を体験してみた

上田紀行の Vol.06

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

働き盛りのうちに始めたい「林住期」の準備

古代インドのバラモン教やヒンズー教に「四住期」という考え方があります。「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」の四つに人生を分け、それぞれの時期を生きていくものです。学生期は学生として学校で勉強する時期。家住期は結婚して子どもを育てながら仕事に励む時期です。この時期はお金のような世俗的な価値も大切です。

興味深いのは、その次の林住期です。いまの日本人でいえば、定年退職しセカンドライフを始める時期に当たります。家住期の世俗的な価値を脇に置き、自分は何を成し遂げたいか、次の世代に何を伝えたいか、自分の人生を見つめ直す時期です。そして最後に遊行期を迎えます。もう一度世の中に出て、やりたいことをやり遂げ、人生の幕を閉じる時期です。

林住期は人生の中で最も自分らしく生きることができる充実期です。ところが会社一辺倒の生活を送っていると、定年退職によって魂が抜けたように気力を失いがちです。人生100年時代といわれながら、定年退職後のことはお金のことくらいしか考えてこなかったからです。これでは、せっかくの林住期を無為に過ごしてしまうことになりかねません。

そうならないためにも、いまの40～50代は早めの林住期づくりを心掛けていく必要があります。明日から会社勤めに行かなくてよくなり、だれからも行動を拘束されなくなるとしたら、自分はどのような生き方をしたいのか、と考えてみるのです。

昨年九月、NHKのアナウンサーが医学部進学のため40代で退局したことが話題になりました。医療の世界には昔から興味があったそうです。身近な人が亡くなる中、病気と向き合い、患者に寄り添うことで、自らの人生を完結させたいという気持ちが高まってきたのではないでしょうか。

このアナウンサーのように40代のうちから自分らしい生き方を実践してみてもいいと思います。家住期を過ごしながら林住期の生き方を取り入れてみるのです。

例えば、年次有給休暇を毎年2週間続けて取得するのはどうでしょうか。その間は何をするか、知恵を絞る必要が生じるため、休暇にテーマ性が生まれていきます。休暇の取得を続けていると、次第にライフワークと呼べるような人生のテーマが浮かび上がってくるかもしれません。

別の自分を発見する方法としては、有給休暇を利用した旅もいいでしょう。見知らぬ土地では、日常生活の間ずっとかぶり続けている「ペルソナ」という仮面を脱ぐことができます。また海外では普段と違う自分になることを求められたりもします。

林住期を意識して生きることは、人生の複線化に向けて自分の視野を広げていくことにもつながるでしょう。会社でバリバリ働きながら、人生の深い意味を探求し続けている――。それは、とても素敵な生き方だと思いませんか。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年7月1日発行　毎月1回1日発行　通巻618号　ISSN　1347-7862

Fole

7
July 2019
No.202

第1特集

0から1を創造できる 未来の〝ゼロイチ人材〟を伸ばせ

第2特集　ヒスイ・琥珀・真珠・金

「ニッポンお宝」産地探訪

上田紀行の Vol.07

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

「お互いさま」で取り戻す 共同体が孤独を救う

結婚して家庭を築く――。それも、自分の生き方やモノの見方を複線化するためのひとつのきっかけになる、と考えています。結婚して2人で住む。さらにはそこに、子どもがいるともっとよいでしょう。

私自身の経験から、そう感じています。子どもを保育園に通わせるようになると、自治体の子育て支援策が気になり始めます。お祭りで子どもの面倒をみる高齢者の姿には、「この人たちが見守ってくれているんだ」と、ありがたさを感じます。

子どもが生まれてから、この町に住んでいるという実感を初めて抱くことができました。「仕事以外のもうひとつの自分」を確立できたのです。そして、未来の社会に対する責任を感じ、社会ともっとつながっていくことを強く意識するようになりました。

地域共同体は本来、人を孤立から救ってくれる存在です。その象徴が、「困ったときはお互いさま」という助け合いです。今は困っていないけれども、自分もいつ困った立場になるかわからない。そのときは誰かに支えてもらうことになるのだから、今は私が困っている人を支えよう、という考え方です。

こうした助け合いは文化人類学でいう「一般交換」の概念を思わせます。これは、AさんがBさんに何かをプレゼントしたら、次はBさんがCさんに、さらにCさんはDさんに、とプレゼントの受け渡しが続いていき、最後はAさんにプレゼントが渡ることを前提に行われる交換行為のことです。「いつかは自分ももらえるだろう」という社会への信頼によって成り立っています。

これに対して2人の間で行われる交換を「限定交換」と呼びます。「プレゼントしても、お返ししてくれないのでは」と疑念が生じるようでは、プレゼントしようとしなくなります。2人の間に強固な信頼関係があることが前提です。

文化人類学では「一般交換」が成り立つ社会は、「限定交換」しか成り立たない社会より強いとされています。「困ったときはお互いさま」の精神が、人を孤立から救うからです。

ところが日本人は戦後、地域共同体を手放してしまいました。しがらみを断ち切り、自由を手に入れようとしたのです。そしてその後、共同体の役割を担ってきた会社も、その役割を失っています。人は今、孤独を引き受けざるを得なくなっています。1人で生きていかなければいけない状況は変えていく必要があります。

そのためには、共同体の意義をあらためて捉え直した上で、それを取り戻していかなければなりません。社会学でいう再帰化です。孤独感を覚えることなく、一方でしがらみを感じることもなく、「確かに社会とつながっている」ということを感受できる、心地良い共同体の在り方を見つけることが求められます。その第一歩こそ、「困ったときはお互いさま」の精神を思い出すことにあるのではないでしょうか。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年8月1日発行　毎月1回1日発行　通巻619号　ISSN　1347-7862

Fole

8
August 2019
No.203

第1特集　海底地図、水中ドローン、鉱物資源……

最後のフロンティア「深海」を探る

第2特集　ビジネスで表情を使いこなす

「顔学」超入門

上田紀行の Vol.08

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

他者の目に縛られず「超越的な存在」を心の土台に

日本人は「他者の目」を気にする傾向を持っています。

一神教の神が強いキリスト教やイスラム教の国々では、その神様の下、「良いこと」と「悪いこと」が決まっています。それらを決めるのは神様であって、人間ではありません。

ところが日本では、人間を超越した神様が「良いこと」「悪いこと」を決めてくれているわけではありません。絶対的な善悪はなく、私たちの間で、その場その場で決まっていくのです。昔は「お天道様の目」「ご先祖様の目」も気にしていましたが、いまではその意識が後退した分、「他者の目」をより強く気にするようになってきました。

そこに加わってきたのが、評価主義の考え方です。もともと「他者の目」を気にする傾向が強いところに「評価で全てが決まる」という社会システムが入り込み、日本人は「評価」に縛り付けられるようになりました。その結果、何か発言しようとするとき、みんながどう思うかを先回りして考え、それに配慮するようになっています。

とはいえ、現代社会は複雑に利害が絡み合います。発言の内容が誰からも100％受け入れられるようなことは、まずありません。他者からの評価というのは、所詮その程度のものなのです。それは当たり前のことなのに、これまでの学校教育の現場では、クラス全員を納得させることを言うにはどうすればいいのか、という視点で発言の内容を考えさせられてきたように思います。

私自身は、「他者の目」を意識するあまり、筆が進まなくなってしまった経験があります。論壇や書籍の批評を新聞紙上で連載していましたが、言論人としては、人に批評される逆の立場に回らないといけないと覚悟を決め、それらの連載から降りたときのことです。単行本でも執筆しないと治らないと思い、あえてその仕事を引き受けました。しかし、書けない。少しでも書こうとすると、頭の中に批判が聞こえてきてしまうのです。

この時、私を救ってくれたのは、富士山です。

編集者に缶詰めにされた河口湖近くのホテルで客室のカーテンを開けると、目の前に大きな富士山が泰然と座っています。その姿を目の当たりにして、人に向かって書こうとするから余計なことを考えてしまう、富士山に向かって書こう、と割り切れるようになりました。評価されるために書くのではない、読者に伝えたいメッセージがあるから書くんだ、富士山に対して恥ずかしくない仕事ができれば評価されてもされなくてもいい、と思えるようになったのです。

人は、自分が絶対肯定できる存在や自分のことを絶対肯定してくれる存在があると、精神的に強い安定を得ることができます。私にとってそうした超越的な存在が、富士山だったのです。「他者の目」に苦しむ現代人には、戦後手放してしまった超越的なものに対する畏敬の念をもう一度取り戻すことが必要なのではないでしょうか。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年9月1日発行　毎月1回1日発行　通巻620号　ISSN　1347-7862

Fole

9
September 2019
No.204

第1特集　「感性」がビジネスを導く時代

今、リーダーは「美意識」を磨け

第2特集　SFの世界じゃない

人類を救う「冬眠」技術

上田紀行の Vol.09

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

挫折に苦しむときこそ 自分の人生を取り戻すチャンス

順風満帆に見える人生でも、実はそうでなかったりします。表面上の人生の成功と自分の人生を生きているというかけがえのなさの感覚は、必ずしも一致しません。それはどうした訳なのでしょうか。

現代の社会は、ポジティブなことは受け入れ、ネガティブなことは排除しようとします。人生は全てポジティブにいけばいいという風潮です。しかもそのポジティブの基準は、「私」ではなく「世間」にあります。

世間的なポジティブとは、いい高校、いい大学に通っているとか、いい会社に勤めているとか、世間の多くが同意するような「いいこと」です。

順風満帆に見える人生とは、そうした「いいこと」に向かって選択を重ねてきた人生です。そこに自分の意志が介在しているならまだしも、そうでないこともあります。そうした選択を、「オートマチックな選択」と呼んでいます。

それは例えば、進学先を選ぶときに、模擬試験の点数が何点だから、その点数で合格できそうな大学の中でいちばん有名な大学を選ぶ。就職先を選ぶときに、就職先として学生に人気のある企業を選ぶ。そうした世間の多くが欲しがるものを手に入れようとする選択です。

そこには、自分の意志はありません。一見成功しているように見えても、交換可能な選択です。模試で同じような点数を取った人なら、自分でなくても同じような選択をする、就職するときの人気に応じて志望する業界が変わる、ということです。

こうしたオートマチックな選択を重ねていると、自分が誰だかわからなくなってしまいます。たとえ表面的でもそれで幸せなら問題ないかもしれません。しかし、世間的にポジティブな方向をオートマチックに選択すればするほど、いつか自分の人生というものを考えなければいけないときが来ると、自分に確信がもてなくなり、自分が交換不可能である、つまりかけがえのないものとは思えなくなってしまいます。それが、順風満帆そうに見えても実はそうでなかったりする理由です。

そうしたオートマチックな選択だけでは生きていけないということを教えてくれるために、人生には不幸な出来事が用意されているのかもしれません。

志望大学に不合格だったり病気になったり家族関係が悪くなったり、人生には不幸の穴が待ち構えています。私たちはこの穴に落ちたとき、自分にとってかけがえのないものは何か、そして自分自身がどれだけかけがえのないものであるか、という問いに直面せざるを得ません。

この不幸な穴は、ポジティブな方向をオートマチックに選択していくという凡庸な行動原理を破壊するために用意されているのです。穴に落ちて、どうしてこうなってしまったのだとうめくそのときこそ、自らの人生を掘り起こし、自分のかけがえのなさを取り戻す大きなチャンスだと思うのです。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年10月1日発行　毎月1回1日発行　通巻621号　ISSN　1347-7862

Fole

10
October 2019
No.205

第1特集　年間廃棄量643万トンを減らせ

深刻化する「食品ロス」に挑む

第2特集

技術力で「宝石」「毛皮」は生み出せるか

上田紀行の Vol.10

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

志をもち、データに翻弄されずに生きる

人間の知性が機械に負けてしまうのではないか――。将棋や囲碁でプロ棋士が機械に負けて以来、そんな不安感が社会を覆っています。機械とは人工知能（ＡＩ）です。

そのＡＩは、ビッグデータを基に最適解をはじき出す計算機にすぎません。何より大事なのは、ビッグデータです。ビッグデータを扱える将棋や囲碁の領域は得意でも、例えば「愛」という簡単にはデータ化できない領域は不得意のはず。そうした領域がある限り、人間がＡＩに支配されることはない、という安心も一方にはあります。人間と互いに役割分担し共存していく、とみるのが妥当です。

ところが今では、人間側からわざわざ機械に負けにいく道を選ぶかのように、あらゆる領域でデータ化を進め、それらをＡＩに解析させています。「愛」にしても、パートナーに向かって「愛」をささやく回数という指標でデータ化され、最適な回数は何回です、とＡＩに指南される時代がこないとも限りません。

ＡＩは本来、人間が利用するものです。ところがＡＩの利用で最適解が得られ、人生の利得を最大化できる、と絶対視してしまうと、人間側がＡＩにすり寄ってデータ化をどんどん推し進め、それに逆に利用されかねない状況に陥る危険が生じます。

例えば、社会保障政策の最適化を図ろうと、国民一人一人の血液検査の結果をデータ化することが考えられます。政策上必要だから、とデータの提供が保険料の負担割合と関連付けられてしまえば、誰もが承諾せざる得ません。

しかし、そうした個人情報が外部に漏れるようなことが起きたらどうでしょうか。40歳を過ぎて再就職しようとしたら、相手の企業から「生活習慣病になるリスクが大きいため、採用できません」と言い放たれてしまうようなことが起きないとも限りません。実際、今年８月には、就職情報サイト上で収集された個人情報を基に予測された内定辞退率が、本人の同意なしに企業に販売されていた、という事件が発覚しています。

とはいえ、システム社会の中でデータ化の流れにあらがうことは、そう簡単ではありません。治安の問題や高齢者の問題など特定課題に対応するためには、それらの領域でデータ化を進め、人間側があえて機械に負けにいかざるを得ない面があるからです。スマートシティー化はやむを得ないのです。その流れを止めることはできません。

ただそうした時代だからこそ、人生の固有性、つまり私が私であるという感覚をどこまで強くもてるか、という点が問われます。その感覚とは、人間とは何か、世界に自らが意味を与えるとはどういうことなのか、を考えていくこととともいえます。それこそ、データ化できないもの。システム社会の中で揺るがないものです。

それが、志です。ＡＩ時代がけん引するデータ化の流れに翻弄されずに生きるには、この志を一人一人がしっかりもつことが必要なのです。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年11月1日発行　毎月1回1日発行　通巻622号　ISSN　1347-7862

Fole

11
November 2019
No.206

第1特集　"変わる勇気"が存続の秘訣

「老舗企業」の大改革！

第2特集

夕張に見る「まちの再生」学

上田紀行の

Vol.11

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

リベラルアーツに学び、自由市民として生きよう

これからの人生を自由市民として生きるか、奴隷として生きるか、あなたはどちらを望みますか。自由市民とは、自分の頭でモノを考え、私たちにとって良いことを追求し、共同体の方向性を決めていく人です。奴隷とは、別にムチ打たれる人ではありません。自分の頭で考えることまではせず、自由市民のいうことを着実に遂行する人です。古代ギリシアや古代ローマの時代、ポリスと呼ばれる共同体はこの２つの階級で構成されていました。

経営者にはかつて、この人になら仕えてもいいと思える、自由市民度の高い人がいました。ところがいまは、崇高な理念を語れる経営者がどれだけいるでしょうか。

多くの経営者は業績主義に縛られ、自由市民というよりむしろ奴隷度のほうが高いように思います。会社にとって業績は絶対善なので、それでも社員はいうことを聞かざるを得ません。業績はもちろん大事です。しかし、経営者がそのことばかりにとらわれ、皆が奴隷化してしまうようでは、それこそ人工知能（ＡＩ）に負けてしまいます。

学生の世界でも同じような事象があります。東京工業大学に着任して10年くらいたったころ、米国の大学に１年渡り戻ってくると、学生から質問が全く出てこなくなった。米国の大学とは対照的です。学生に問い掛けてようやく出てきた質問は、提出を求めたレポートの評価基準を問うものでした。どうすれば自分が評価されるか、そればかり気にしているわけです。これには、がくぜんとさせられました。

その質問に答える形で評価軸を与えた途端、学生はそれに従うことの是非は全く考えずに、最適解を求めようとします。これでは「優秀な奴隷」です。彼らから同じようなレポートがたくさん提出されるわけです。私たちの教育は「優秀な奴隷」を育てるためのものなのか、自由市民を育てるためのものではなかったのか、という疑念が生じます。

優秀でも奴隷である以上、イノベーションは起こせません。誰かが発した問いに対して答えを用意することはできても、自ら問いを発することができないからです。優秀な学生の集まる大学では自由市民を育てる教育を行うべきです。

その役割を担うのが、私が担当するリベラルアーツです。そのまま訳せば「自由にする技」。つまり、自由市民を育てるものです。

例えば2016年以降は、学士課程１年生を対象に「東工大立志プロジェクト」を実施しています。そこでは学生一人一人に志を立てることを求めています。著名講師の話を聞いた後、４人１組でその内容の是非を討議し批判的思考を培う。その機会を重ね、２カ月もたたないうちに、各自に志を発表してもらいます。この志こそ、自ら課題を発見し、それを探究しながら関わりを続ける中で生まれていくものです。

あなたも自由市民として生きていこうとするなら、リベラルアーツにふれてみませんか。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『目覚めよ仏教！』『人生の〈逃げ場〉』他著書多数

2019年12月1日発行　毎月1回1日発行　通巻623号　ISSN　1347-7862

Fole

12
December 2019
No.207

第1特集　パフォーマンスを飛躍的に上げる

「集中力アップ」23の究極メソッド

第2特集　脳とAIの一体化、分身ロボットの普及……

テクノロジーは人間をどこまで「拡張」するか

上田紀行の　最終回

「現代人の生きる力」

構成・文：茂木俊輔　イラスト：もとき理川

自分を支えてくれるものを探す旅を続けていこう！

教え子だった大学院生が学部生のとき、どうやって生きていけばいいかわからなくなり、プチ家出をしたそうです。夜道をさまよい、たどり着いたのは、教会でした。ドアを開けて誰もいない教会の薄暗い礼拝堂に何時間も座り続けていると、胸につかえていた重い石のようなものがスーッと軽くなり、空が白み始めた中を家路に着いた、と言います。以降、人生の意味とエネルギーが回復し、その後、ぼくの研究室に来た、というわけです。

悩みを打ち明けたわけでもないのに、なぜ回復したのか。話を聞くと、座っているときは、助けを求めれば誰かが出てきてくれるはず、と思ったそうです。そしていよいよ助けを求めようとしたとき、もう一人の自分のささやきが聞こえたと言います。「あなたの中には生きる力があるから、その力を頼みにしてもう1回生きてみたら。またボロボロになったら、ここに来ればいいよ」と。

その声を聞いて、「そうだ、もしまたダメになったら、ここに来ればいいんだ」と、なぜか元気になって、もう1回生き直してみようと思ったそうです。どんなにボロボロになろうが、支えてくれるところがあるんだ、と体感したのです。ひどく落ち込んで死にたくなっても無条件に支えてくれる存在がある——。そうした支えがあるというある種の確信が、人生へのチャレンジを後押ししてくれるのです。

企業からの依頼で講演を引き受けたとき、年長者にはこう伝えます。「あなたたちの時代、企業は終身雇用だったし、あなたを見捨てることがなかった。だから、あなたはチャレンジできた。若者には『チャレンジしよう。3回くらいの失敗は責任をもつから』くらいのことを言ってください」と。また若者にはこう伝えます。「自分を支えてくれるものをもとう。会社での業績だけに自分を一元化してしまうと、必ず訪れる不調や挫折から立ち直れるか。大きな支えをもつことで、人生、チャレンジできる。自分を支えてくれるものが何かを探す旅を続けていこう！」と。

世は諸行無常です。一生、強者でいられる人はまずいません。給与がカットされた、長期入院を余儀なくされた、配偶者が亡くなり幼い子と残された、親が要介護になった……。状況が変われば、強気一辺倒ではいられなくなります。

だからこそ、人間の弱い部分に着目してほしい。誰だって強いときも弱いときもあります。強い立場のときは弱い立場の人を助ける。自分が弱くなってしまったら、強い人の助けを借りればいい。また弱い者同士で助け合えばいい。

私たちの中には人間を救う力や立て直す力が内蔵されています。初詣に行く、合格祈願のお守りを買い求める、身近な故人に見守られている気がする……。そうした「宗教性」のベースも備わっています。それらをもっと積極的に活用してほしいと願っています。 F

うえだ・のりゆき

1958年生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長。86年よりスリランカで「悪魔祓い」のフィールドワーク調査を行い、「癒しブーム」を起こす。『生きる意味』『人生の〈逃げ場〉』『立て直す力』他著書多数